

## ⑧大型の壺（粉青沙器四耳壺）

平成15年、大正町の西浦遺跡で、李氏朝鮮時代の朝鮮半島で作られた「粉青沙器四耳壺」が出土しました。同じ器形の例はなく、大変貴重な資料です。このような壺は、朝鮮王朝時代の上流階級が胎衣壺（胎盤を埋納するための壺）として使用していたことから、鳥栖にもたらされた後も祭祀などに使われ、埋納されたと考えられます。

「粉青沙器」とは、灰色の素地に白い土を用いて様々な装飾が施されており、その上に釉薬がかかって全体が灰青色に見える土器のことで、15世紀～16世紀ごろに盛んに作られていました。その間に製作技法や装飾は変化しています。

この頃のやきものは、高麗王朝の滅亡と朝鮮王朝誕生に伴い、大きな変化が見られます。特に仏教文化から儒教文化へ移行は影響が大きく、それまでの青磁文化から白磁文化へと転換していくこととなります。

### 展示資料について



本資料の胴部には象嵌が5列あり、その間に鋸歯状文（のこぎりの歯のような文様）が入っています。肩部から胴部にかけては刷毛目が残ります。15世紀後半の粉青沙器の特徴として、刷毛目技法の発達が挙げられることから、その頃に製作されたものと考えられます。